

学園

だより

平成16年 6月15日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@mx4.et.tiki.ne.jp

<http://ww4.et.tiki.ne.jp/~jerko/>



第40期 入学生 蒜山ハーブガーデンにて

巻頭のこぼれ

校長 古好秀男



昭和三十
六年十
一月に創
立して以
来、四年

間続いた岡山県立酪農大
校の教材施設の充実を図
るため、昭和四十年に農林水
産省中国四国農政局のご指
導を受けて、中国五県、四
国の四県、兵庫県の十県を
構成県に財団法人中国四国
酪農大に改組して以来
四十年間高度な酪農経営知
識を持った酪農後継者の養
成一筋に努力して参りまし
たが、酪農大の卒業生
が、構成県のみならず、酪
農地域の中核的な存在とし
て規模拡大を図り、酪農振
興推進関係者からも大きな
信頼を得て、酪農大の卒業
生としての真価を発揮
する時代が到来して来たの
ではないかと思っていま

す。その間、農林水産省、
中国四国農政局、構成県、
地元川上村、八束村、JRA、
地全協、畜産会、酪農
ヘルパー協会、削蹄師会、
おからく、蒜酪等多くの関
係者の皆様方の温かいご指
導ご支援を頂き、今日まで
に一、〇五一名の優秀な卒
業生を送り出しておりま
す。その内の五十二%が酪
農後継者、二十五%が酪農
ヘルパーを始め畜産関係団
体等に就職され、それぞれ
の地域で中核的な指導者と
して大活躍をされておられ
ますことは酪農大関係
者にとりましては限りない
喜びであります。特に二年
間の短い修学期間の中で実
践教育を重視した人間形成
については、全国の酪農家
の皆様方に大変大きなお力
添えを頂いておりますが、
酪農大が堂々と胸を張

って誇れる実践教育の宝
は、北は北海道から南は沖
縄に至る酪農家の皆様方に
大変お世話になり、学生自
身の精神的な格闘から生ま
れる自制心と忍耐を養う、
二年生の六ヶ月間に渡る校
外研修であると言っても過
言ではありません。教育の
成果は、その大の長の長い
歴史の中で、卒業生が如何
に社会的に貢献し活躍して
いるかによって世間一般に
評価されるものであります
が、教育の根幹をなす基本
的な考え方が本来教育のカ
リキュラムの中に生かされ
ていない限り二年間と言う
短期間に優秀な後継者の
人材を養成することは出来
ません。

ね、考えに考え抜いた結果、
今日の様に一年生で酪農経
営の基礎的知識と搾乳作業
を中心とした実践教育を徹
底して行い、二年生になつ
て、一カ所の酪農家で二ヶ
月間研修を行い、次いで二
カ所に移動し都合三カ所で
六ヶ月間の長期に渡る校外
研修を酪農家で実施するこ
とが、効果的であるとの基
本的なありかたに到達した
のではないかと思っております。

揃っていないければなりません。
近年、酪農家の戸数頭数
ともに減少しております
が、規模拡大の進む中で、
ゆとりある酪農を目指すた
めには酪農ヘルパーの存在
が欠かせないものとなって
来ております。更には酪農
家に於いても少数精鋭で企
業的な感覚を身につけた優
秀な酪農家の後継者を養成
しなければなりません。特
に繁殖、生乳の衛生的管理、
牛群管理知識を充分に身に
付けさせることが最も重要
になって来ております。
酪農大と致しまして
は、WTO交渉を始め世界
的な生産流通機構に対応出
来る優秀な後継者の人材を
養成して参りたいと考えて
おりますので、関係者の皆
様方のより一層のご理解と
ご指導を賜りますようお願い
を申し上げます。
最後になりましたが、大
変お忙しいこととは存じま
すが、同窓生を始め関係者
の皆様、時には酪農大の校
へも足を運んで頂き、明日
の酪農を語ろうではありませんか。
お待ちしております。

幸いなことに、酪農大
校は、創立以来、情熱的に
勤務された先人たちが経験
に基づいて試行錯誤を重

巻頭のこぼれ

校長 古好秀男



昭和三十
六年十
一月に創
立して以
来、四年

間続いた岡山県立酪農大
校の教材施設の充実を図
るため、昭和四十年に農林水
産省中国四国農政局のご指
導を受けて、中国五県、四
国の四県、兵庫県の十県を
構成県に財団法人中国四国
酪農大に改組して以来
四十年間高度な酪農経営知
識を持った酪農後継者の養
成一筋に努力して参りまし
たが、酪農大の卒業生
が、構成県のみならず、酪
農地域の中核的な存在とし
て規模拡大を図り、酪農振
興推進関係者からも大きな
信頼を得て、酪農大の卒業
生としての真価を発揮
する時代が到来して来たの
ではないかと思つていま

す。その間、農林水産省、
中国四国農政局、構成県、
地元川上村、八束村、JRA、
地全協、畜産会、酪農
ヘルパー協会、削蹄師会、
おからく、蒜酪等多くの関
係者の皆様方の温かいご指
導ご支援を頂き、今日まで
に一、〇五一名の優秀な卒
業生を送り出しておりま
す。その内の五十二%が酪
農後継者、二十五%が酪農
ヘルパーを始め畜産関係団
体等に就職され、それぞれ
の地域で中核的な指導者と
して大活躍をされておられ
ますことは酪農大関係
者にとりましては限りない
喜びであります。特に二年
間の短い修学期間の中で実
践教育を重視した人間形成
については、全国の酪農家
の皆様方に大変大きなお力
添えを頂いておりますが、
酪農大が堂々と胸を張

って誇れる実践教育の宝
は、北は北海道から南は沖
縄に至る酪農家の皆様方に
大変お世話になり、学生自
身の精神的な格闘から生ま
れる自制心と忍耐を養う、
二年生の六ヶ月間に渡る校
外研修であると言つても過
言ではありません。教育の
成果は、その大の長の長い
歴史の中で、卒業生が如何
に社会的に貢献し活躍して
いるかによつて世間一般に
評価されるものであります
が、教育の根幹をなす基本
的な考え方が本来教育のカ
リキュラムの中に生かされ
ていない限り二年間と言う
短期間に優秀な後継者の
人材を養成することは出来
ません。

ね、考えに考え抜いた結果、
今日の様に一年生で酪農経
営の基礎的知識と搾乳作業
を中心とした実践教育を徹
底して行い、二年生になつ
て、一カ所の酪農家で二ヶ
月間研修を行い、次いで二
カ所に移動し都合三カ所で
六ヶ月間の長期に渡る校外
研修を酪農家で実施するこ
とが、効果的であるとの基
本的なありかたに到達した
のではないかと思つており
ます。

揃っていないければなりません。
近年、酪農家の戸数頭数
ともに減少しております
が、規模拡大の進む中で、
ゆとりある酪農を目指すた
めには酪農ヘルパーの存在
が欠かせないものとなって
来ております。更には酪農
家に於いても少数精鋭で企
業的な感覚を身につけた優
秀な酪農家の後継者を養成
しなければなりません。特
に繁殖、生乳の衛生的管理、
牛群管理知識を充分に身に
付けさせることが最も重要
になって来ております。
酪農大と致しまして
は、WTO交渉を始め世界
的な生産流通機構に対応出
来る優秀な後継者の人材を
養成して参りたいと考えて
おりますので、関係者の皆
様方のより一層のご理解と
ご指導を賜りますようお願い
を申し上げます。
最後になりましたが、大
変お忙しいこととは存じま
すが、同窓生を始め関係者
の皆様、時には酪農大の校
へも足を運んで頂き、明日
の酪農を語ろうではありませんか。
お待ちしております。

幸いなことに、酪農大
校は、創立以来、情熱的に
勤務された先人たちが経験
に基づいて試行錯誤を重

教務課だより

第三十八期生 卒業証書授与式

平成十六年三月十七日（八ページ別表）が卒業。

理事長表彰（とくに学業品行優

秀な者）

杉田 くみ（広島県）

全国農業大学校協議会表彰

（とくに成績優秀な者）

杉田 くみ（広島県）

校長表彰

優等賞（学業品行優秀な者）

佐藤桂代子（島根県）

田中 潤（広島県）

成瀬 浩時（兵庫県）

森本恵美子（熊本県）

精勤賞（遅刻欠席などがなく精勤

に学習した者）

小河 和敏（兵庫県）

努力賞（学業、学校生活すべてにわ

たり努力が認められた者）

小原 祥宏（岡山県）

砂田 恵（山口県）

廣田 望美（岡山県）

前田 優（兵庫県）

渡邊 靖（栃木県）

卒業論文賞（卒業論文が独自性に富

第四十期生入学式

み、優秀であった者）

佐藤桂代子（島根県）

中條 正紹（香川県）

森本恵美子（熊本県）

平成十六年四月四日、第三十九期生二十六名（八ページ別表）が入学。
内訳は、男子学生十九名、女子学生七名です。後継者が十四名です。
出身地で見ると、中国四国及び兵庫県が十七名（うち岡山県出身者四名）、その他地域は遠くは宮城から長崎までの九名となっています。



38 期 卒 業 生

農大研修生の集い

昨年十月二十二～二十三日

日に鳥取県赤碕町で「第二十一回中国ブロック農業大
学校研修生のつどい」が開
催されました。当日は、中
国五県の県立農業大学校と
酪農大学校の学生が一堂に
集まり、交流会と球技大会
を実施しました。

球技大会では、当日はあ
いにくの天候によりソフト
ボールからバレーボールに
変更になりました。その甲
斐があつてか、我が酪大チ
ームは見事初優勝を遂げる
ことができました。

今年度は島根県で大会が
開催予定です。一年生は長
綱助手のもと今度はソフト
ボールで連覇を目指してお
ります。

卒業生の皆さんへ 退職にあたって

津田 清子

蒜山は現在青田の季節を
迎えています。この時期は、

私のお気に入りの季節で、
毎日楽しく過ごしており
ます。水面に映る景色は魔
法のようにいくから見ても
飽きません。

卒業生の皆さまにおかれ
ましては、お変わりござい
ませんか。

さて、私は長い間お世話
になった酪農大学校を三月
三十一日をもって退職いた
しました。

卒業生の皆さんには、仲
良くしていただきありがと
うございました。厚くお礼
申し上げます。また、ご迷
惑をおかけしたこともあろ
うかとお詫び申し上げます。

現在は、今日の日を迎え
られた幸せに感謝しながら、
山菜採りや草取り、また趣
味に励んでいるところです。

ここに紙面をお借りして
卒業生御一同様のご健康と
ご活躍をお祈りいたします
とともに退職するに当たり
一言ご挨拶申し上げます。



卒業生から 在校生から



同窓会会長
筒井 一

営の良し悪しを左右します。県南の地方では、五月上旬といえどもイタリアンの刈り取りが最中かと思いますが、作業に当たっては皆様、事故や怪我など無い様注意され順調に終わりますよう祈っております。

同窓会よりお知らせ

第六回総会の開催について

次の日程で(財)中国四国酪農大校同窓会第六回総会が開催されますので、同窓生の皆さまにおかれましては、是非ご参加くださるようよろしくお願い申し上げます。

日時

平成十六年七月十三日(火)
午後二時三十分より

場所

国民休暇村「蒜山高原」
〒七一七-〇六〇-一
岡山県真庭郡川上村大字
上福田一二〇五-二八一
TEL・〇八六七
六六一二五〇一

あの時があった から頑張れる

第三十八期生 前田 優

私はこの春大好きな酪大を卒業し、社会人としての第一歩を踏み出しました。今、私は京都で酪農ヘルパーとして充実した

毎日を送っています。酪農家一戸一戸のこだわりの作業を覚え、酪農家の休日を作ってあげる仕事。なおかつ「信頼」ということが一番大切な仕事です。酪大での二年間は本当に楽しく、自分自身の成長と技術の向上、心の友、親友をつくることが出来ました。二年になり校外研修へでて辛かった時、苦しかった時、ともに支え合えたのが友達という存在でした。寮生活においても、バカをやってみたり、ケンカしたり、夜中まで布団の中でお互いの夢を語り合い共感し、励まし合える友達がいたからこそここまで成長できたのだと思います。

今こうして社会人の一人となり、親友とは離れてしまいました。けれど心の友なので、いつも一緒にそれぞれ頑張っています。四月からの新生活については、日々葛藤です。洗濯は寮です。問題にはなりません。寮では食堂があったので、ほとんど自分で作ったことはないし、たまに寮でみんなで作って食べる時は基本的に鍋になってしまいうので、毎日の食事としては向いていません。食堂のゴハンが私たち生徒を支え、食堂のおばちゃんたちに世話になりっぱなしだったんだなあ、と気づいた今日この頃です。私の仕事は体力勝負です。健康でなければこなしていく事はできません。まだまだ問題は多いけど、自分なりに努力して解決していきたいと思っています。

この中で述べた酪大での二年間はほんのわずかですが、言葉にならない大切なことがたくさんあります。この二年間は私にとってずっしりとした礎となり、今の私を支える大きな力の源です。「みんな頑張っている。私も頑張らないと。負けたくない」そう思います。まだ私は走り出したばかりです。今はまだ向かい風ばかりですが、追い風に乗り向かっていきたいと思います。

酪大にいる後輩達にも、きっと今は気づかなくてもこの酪大の二年間はかけがえのないものとなるはず。今頑張れること、興味を持ったこと、必ずやって損はありません。人の話を聞ける柔軟性とプライドを高く持ち、努力し、良い2年間を築いてください。

「汗を厭わず、命を尊び、日々高きを志す」
高校の校訓が今の私のモットーです。これから酪農をするなら、きつとどこかでまた皆さんに出会えると思います。その時は皆さまよろしくお祈りしますね。将来の酪農は明るいぞお!!

一年を振り返って

第三十九期生 富谷 智子

昨年四月に酪大に入学して早くも一年が過ぎました。初めての寮生活や牧場での実習は、楽しみであるのと同時に不安でもありました。朝五時三十分からの搾乳では、起きるのがつらく、

寝坊しそうな日もありました。牧場での実習だけでなく免許取得のためのトラクターやけん引の練習など、大きな壁となるものがたくさんありましたが、そのつど先生や先輩に教えていただいたり、同期生の仲間と励まし合い力をあわせて乗り越えてきました。そんな「実習と勉強の両立」という生活でしたが、じつは講義中は居眠りすることもありました……。

共進会では、毛刈りから調教まで先生に教えてもらいながらも全て自分たちで行いました。そして酪大の牛は、県共では、一部の優等三席に入り、中国BWは四部で一等二席になりました。実習や勉強以外では、とても大変だった蒜山登山や岡山農大とのスキー交流会があったり、農大交流会では主催地の鳥取県で、三十九期生全員でしばし牛たちの事も忘れ一泊二日の泊まりがけで参加しました。鳥取農大とのソフトボール大会は、悪天候のためバレーボールに変更になったのですが、酪大にバレー経験者がいたこともあり優勝することができました。優勝は、きつとみんなの心にもいい思い出として残っていると思います。

また、蒜山といえば冬の氷点下での実習はつらいものがありました。何より寒い事だけでなく雪の降る量が多いのにびっくが近いので、初めてスノーボードに挑戦してみました。きつと初めてスノーボードをする人も多かったです。実習が終わってすぐにスキー場に行き、

同窓会員の皆様におかれましては、益々ご健勝でご活躍のことと拝察申し上げます。また平素より同窓会活動にご協力頂いております事に、この場を借りて感謝申し上げます。
本年は総会開催の年となっておりますが、例年出席が少なく寂しい総会となっております。今年も懇親会で大いに盛り上がり交流を深めたいと思っております。お忙しい事とは存じますが、できるだけ多数の皆様の参加をいただきますようお願い申し上げます。
さて、今年は三月後半から四月にかけて大変暖かい日があり、桜の開花も去年より早かったのですが、五月も良い天気が続くことを願っております。こちらのほうでは、五月下旬から六月上旬、中旬の梅雨入りまでの間に、一番草の収穫をするのですが、一年のうちで一番忙しくまた大事な時期がもうすぐやってきます。
この時期の作業が順調に進むかどうかによって、一年間の経



一生懸命練習した甲斐もあって上達も早く、ほとんどの人が滑れるようになっていました。いろいろなことがありすぎて、語り尽くせないほど毎日が充実して楽しかった一年間。個性派ぞろいの先生方や先輩方から私たちがここまで成長することができました。またいつもみんなの健康を心配してくれる食堂のおばちゃんや蒜山の方々。お世話になっていてるたくさんの方、そして何より苦しい時も楽しい時もともに過ごしてきた仲間のおかげで無事一年を過ごす事ができました。

二年生になり、長期にわたっての校外研修では、今よりも更に人間的にも技術的にも成長して帰って来たいと思います。

酪大のみなさま、今年も三十九期生をよろしくお願いします。

ヤンマー懸賞作文入賞
第三十八期生の砂田恵さんが、平成十五年度ヤンマー懸賞作文入賞(銀賞)を受賞しました。受賞した作文は次のとおりです。
(銀賞)

衝撃的な牛との出会いと私の夢
砂田 恵
(財団法人中国四国酪農大学校 二年)

私は幼い頃から動物好きで、両親におねだりして近くにある動物園に何回も通った思い出もあり、テレビの動物番組はすべて録画してもらい、何回も繰り返し楽しんでいました。中学生、高校生と成長するにつれ動物好きはますます高揚して、将来は牧場で働くか、動物園の飼育係になりたいと思うようになりまし。そして、私の周りに動物や自然の多い環境で生活を送りたいと考え、実家から近い山口県立田布施農業高校に入学しました。

新学期も早く、実習の最初の時間に、神様の恵みか、私は畜産実習をすることになりました。実習が始まる前からあごがれの牛にさわられる喜びで、私の胸は高い鼓動を奏でていました。

牛舎に近づくと、牛舎特有のにおいが私の鼻をおそいました。「いやー、ちょっと臭うな」と思いつつ、牛舎に足を踏み入れました。すると、首をスタンションに繋がれた大きな牛たちが体をギューンとひねらせて、私たちの方を一斉に見たのです。「かわいーっ!」。私は心の中でつぶやきました。先生から「ちょっとおまえら、牛をさわってみろ!」と言われ、うれしさと緊張で恐る恐る牛に近づき、「動かないで、かわいい牛ちゃん!」とつぶやきながら、そーっと手を伸ばして、まあいお尻にソフトタッチしまし

た。「温かい!」。まるで私の体全体を包んでくれるようなミンクの温かさでした。

その瞬間、私は今までの「牛は大きな角で、まるでスペインの闘牛のように、今にも突進するもの」と考えていたことは固定観念に過ぎないことがはつきりしました。「牛は優しい心を持ち、温かい優しい目で人間を包んでくれる」という気持ちでいっばいになりました。それが、私と牛との初めての、まさに衝撃的な出会いとなりました。

高校二年生になると、今までのローテーションで行っていた実習も専攻に分かれ、より専門的に一つ一つの部門が勉強できるようになり、私は迷わず畜産を専攻しました。実習を重ねていくうちに、牛には蹴飛ばされるし、雄牛には角で腹を突かれるし、実習服は実習をするたびに糞まみれになるし、餌の稲ワラ切りをすると切りくずが鼻の中にいっばい入り、真っ黒になりました。

九月には水田農家さんの家に稲ワラを取りに行き、汗をたくさんかきましたが、苦しくても、辛くても実習生「九人」が一緒に、毎日の実習が楽しくて、本当に畜産を専攻して後悔したことはありませんでした。

実習中、青空の下で、同じ畜産班の人が、「畜産サイコー!!」と叫ぶと、みんなで「畜産サイコー」と叫びました。本当にみんな牛が大好きな人たちばかりで、「最高の畜産班」だった、と私は今でも胸を張って言えます。

農業高校三年生の夏休みに、四泊五日で山口県の大島の酪農家さんの家で酪農研修をさせていただきました。山口県はあまり酪農の盛んな県ではありません。研修先

は搾乳牛が三十三頭、育成牛が五頭の対尻式の繋ぎ飼いの方式の牛舎で、おじさんとおばさんの二人で経営をされていました。私にとってはとても大きな牧場に感じました。

搾乳はパイプラインで行われ、時間はだいたい朝八時から、夜も午後八時からでした。一般的に搾乳は朝の五時からだと思っていきましたが、朝の苦手な私にとってはずラッキーでした。

三日目くらいに牛のお産に遭遇しました。私たちが母牛の周りに集まった頃には、母牛は座り込み、涙を流して「ウンモー」と鳴きながらいきんでおり、子牛の顔が少し出かけていました。

母牛は私たちが来たせいか、急にいきむのを止め、数分間同じ体勢で、母牛も周りの人間たちも息をひそめて、次の瞬間を待っていました。

「もう少し頑張って!」「立派な赤ちゃんを産んで!」。私は心の中で祈りました。

すると母牛は「モー」と鳴きながら一気にいきみ、元気な雌の赤ちゃんを産みました。

「すばらしい!美しい!」。私は瞬間であったが、時の経つのを忘れていたような気がしました。その時、生命の誕生のすばらしさに改めて感動しました。

その日の夜、おじさんと将来のことについて話していると、おじさんが「酪農家になるのは、あんまり薦められんなあ。休みもないし、夏は暑いし、冬も寒い。自分ごとより牛の方が大事じゃけのおー」「しかも、金もいっばいいるしのおー」とおっしゃいました。「やっぱし経営となると、たいへんなんだなあ」と私も思いました。農家さんでの実習を終え、進学

いて一生懸命考えてみました。「やっぱり動物(牛)が好きだし」「動物と離れて生活できないし」「酪農経営もやってみたいし」……。

私は一大決心をして、岡山県の蒜山にある財団法人中国四国酪農大学校に進学することになりました。岡山県と鳥取県の県境で、大山隠岐国立公園の中にあり、牧歌的な景色の中でジャージー牛とホルスタイン牛の実践的酪農経営が学習できる学校です。

平成十四年、四月とはいえ肌寒い四月三日に、酪農大学校の入学式が盛大に行われ、新入生二十八名が入学しました。

酪農大学校に入学してから一年があつという間に経過しました。二年生になると全国各地にある(北は北海道から南は九州沖縄まで)三カ所の研修先農家さんでそれぞれ約二カ月間、合計六カ月間、学校から離れて単身で、酪農の実習を行います。そこではたくさん

の出会いがあり、いろいろな経験をし、たくさんの方の失敗をして、毎日が新しい発見の日々でした。この研修で私自身少し大人になり、大きく成長でき、充実した半年だったと思います。

北海道の牧場で親方が言った一言。「牛に感謝の気持ちを持たずには」。私も牛に感謝し、日々頑張りたいと思っています。

牛に出会って五年目。まだまだ知らないことが多すぎますが、これからも「牛」のため、私のために一生懸命勉強していきたいと思っています。

私は自信を持って言います。「私は牛が好きです」。

第1牧場だより

日に日に暖かくなり始め、蒜山三座で溶け始めた雪が春の訪れを物語る今日この頃ですが、卒業生の皆様にはお元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。平成十六年度の第一牧場は昨年同様、山田場長、芦田技師、樋口助手の三人でがんばっています。

乳用牛においては、職員・学生の努力の甲斐あって年々牛群の質も向上しています。現在の乳量は平均八、八〇〇kgですが、九、〇〇〇kgを越えるのも近いと思われます。共進会においても常に上位入賞牛がでており、十五年度十月に行われた岡山県畜産共進会においては優等賞三席に入賞しました。さらに、平成十三年度から積極的に利用してきた輸入精液により生産された娘牛たちの分娩も始まり大いに期待していると

ころです。

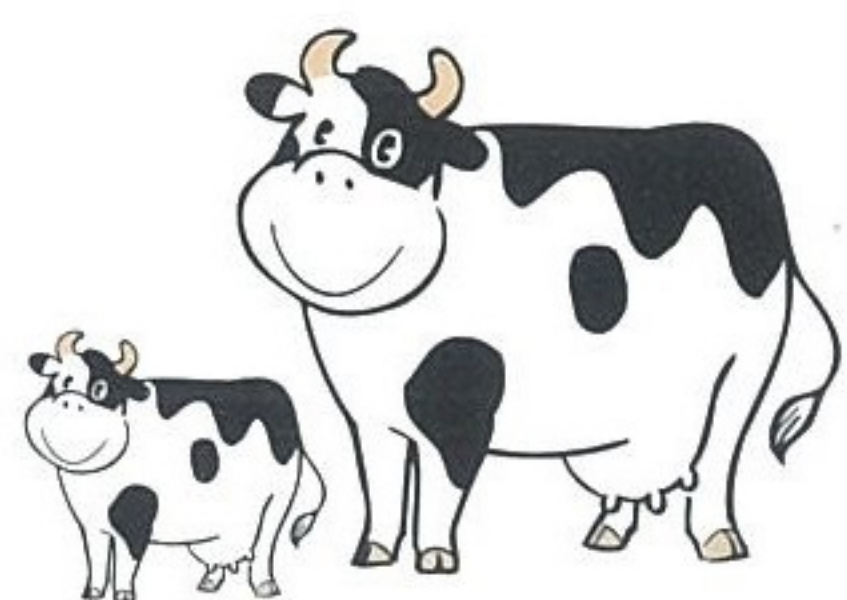
また、BSEの発生にともない十四年度から規模を縮小した肥育牛については、一時期に比べ価格が安定してきましたが、依然として苦しい状態であるため、引き続きジャージーF1の雄のみを飼養し現在の規模を維持していく予定です。

牧草の状況については、十五年度は冷夏長雨の影響でトウモロコシの生育はやや不良でした。このため、サイレージはバンカーサイロ二基とも八割程度の詰め込み量にとどまり、前年度に比べ微減という結果になりました。また、牧草についても草地の更新などの試みを行ったものの、トウモロコシ同様、冷夏長雨の影響には勝てず昨年度よりも二〜三割の減収となりました。本年度も草地を更新し増産を図ることにしています。

最後に

なりまして、今年も本校から二十三名の卒業生が力強く巣立っていき、二十六名の新入生が期待に胸をふくらませて入学してきました。

卒業生の皆様には酪農大学の近くにおこしの際には、本校に足を運んでくだされば幸いです。



飼育頭数

平成16年4月1日

区分	第一牧場	第二牧場
経産牛	47	93
育成子牛	31	71
乳用牛計	78	164
肥育牛	22	—
繁殖和牛	2	—
肉用牛計	24	—
合計	102	164

第2牧場はジャージー牛 (単位:頭)



第2牧場だより

第2牧場でも昨年より春の訪れは早く、初夏を思わせる陽気が続いています。昨年は冷夏の影響で牧草やトウモロコシの生育も悪く、今年の天候に期待しています。

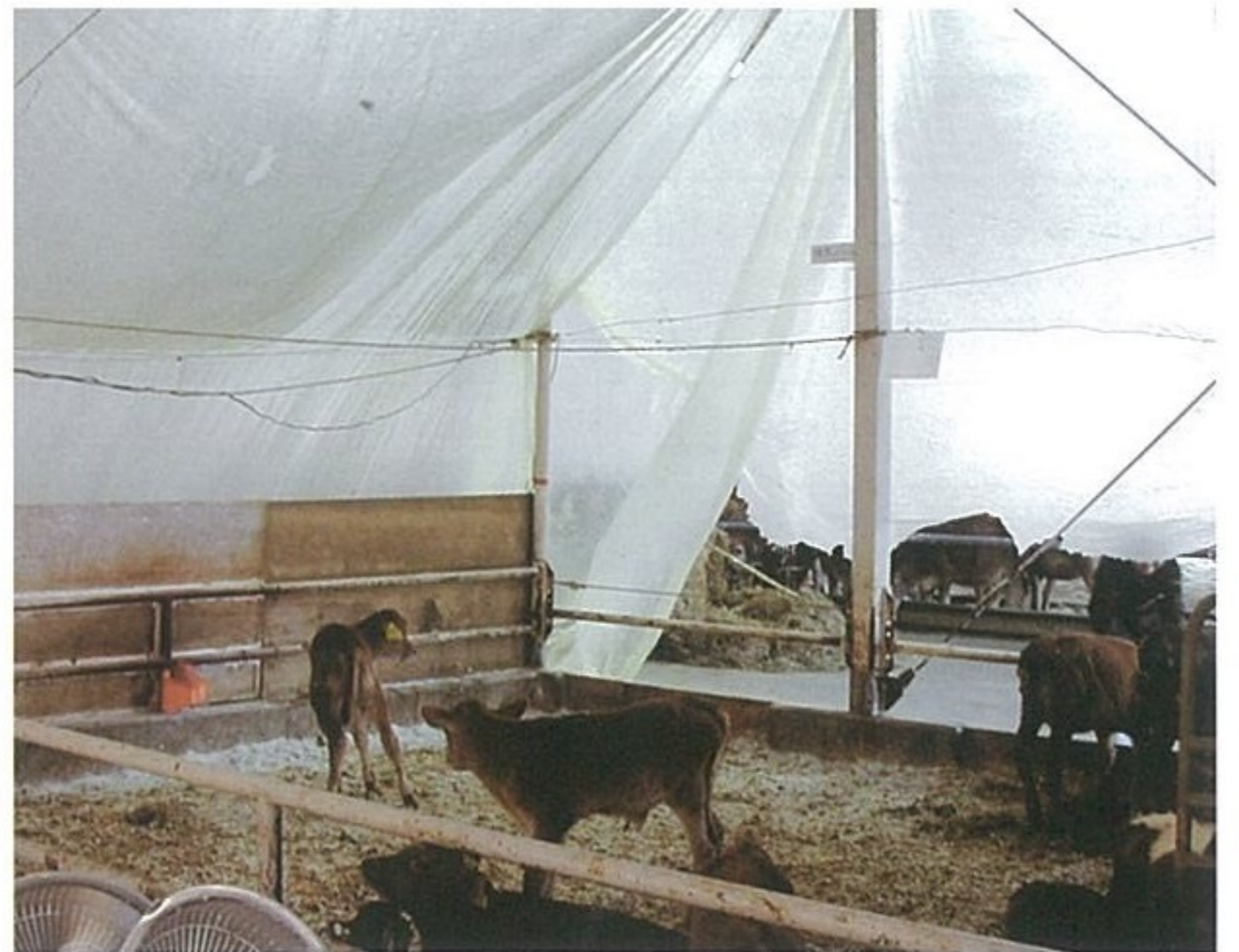
この春も恒例となった白樺植樹が四月十三日にポプラ並木で新入生の手で植えられました。また、初放牧は昨年より1週間ほど早い四月二十日に行い、この日は育成牛だけでしたが、初めての放牧で元気に走り回っていました。

今年度は第2牧場での人事異動はなく、昨年と変わらず坂部吉彦、いざさ啓介、溝口泰正、磯田博、池田良弘の五名でがんばっています。昨年は、牛群の増

頭と生乳の増産のためジャージー牛の導入を行いました。初妊牛として郡内から二頭、群馬県から十頭、またヌレ子の雌子牛も郡内から二十四頭導入しました。そして、これらの導入子牛を含めた子牛の疾病対策として冬季間の寒冷対策を行いました。具体的には、個別飼いのペンと群飼育の哺乳ステーションのある牛舎の一面をビニールシートで覆い、コンクリートの床は断熱材を挟んだフローリングにしました。そして、ペンには保温マット、子牛の前にはホームセンターで購入したハロゲンヒーターを並べ準備万端整えました。しかし、2牧の寒さはそれほど甘いものではな

く、ハロゲンヒーターの台数は日々増加し、最終的には覆いの中でストーブを焚くまでにエスカレーターしていました。子牛たちはハロゲンヒーターの前に群がり、初めは滑つてうまく歩けなかったフローリングにも慣れ、多少の寒さは防げたように感じられました。その一方で、ハロゲンヒーターのコードは毎日のように子牛にかじられ、覆いも破られるため補修に追われる毎日でもありました。今年の冬はこれらの経験を生かし、寒冷対策を行っていきたいと考えています。

卒業生の皆様には近くにおいでの際は是非ともお立ち寄りいただき、アドバイス等もいただけたら幸いです。



思います。お越しの際は声を掛けていただきますようお願いいたします。

職員紹介

- 校長 古好 秀男
- 副校長 西家 純一◎
- (教務課長兼務)
- 相談役 有富 敬典◎
- 【総務課】
- 課長 新免 眞哲
- 助手 有富 英美
- 事務員 法花千恵美◎
- 【教務課】
- 主任 岡田 英樹
- 技師 西 淳子◎
- 助手 長綱 則之
- 調理員 講元 勝代
- 〃 石原 峯子
- 〃 谷口 育子
- 【経営課】
- 課長 山田 徹夫
- (第一牧場長兼務)
- 技師 芦田 草太
- 助手 樋口 照夫
- 第二牧場長 坂部 吉彦
- 技師 篠 啓介
- 〃 溝口 泰正
- 〃 磯田 博
- 〃 池田 良弘

◎印は新職員